

## 中国化学会第28年会・80周年記念大会に参加して

中国化学会は、1932年8月4日、南京で創設された。2年に一度開催される年会に合わせて、四川省成都の四川大学を会場として、80周年記念大会が開催された（4月13日～4月15日）。日本化学会は、岩澤康裕会長と常務理事が招待され出席した。また、年会期間中開催された第2回日中若手化学者フォーラムに7名の代表を送った。

日中の化学会は、2009年の日中国際協力協定締結、日中若手化学者フォーラムのスタート、日本の著名な先生方の研究室で学ばれた多くのお弟子さんが中国化学会・化学界の幹部として活躍していることなどから良好な関係にある。今回、世界でトップに立ちつつある科学技術、化学の様々な指標をベースとして中国がゆるぎない自信を示す姿や、米国化学会や英国王立化学会が中国を伸びゆく市場としてとらえエネルギーを投入していることが強く印象に残った。

### 開会式、四川の熱気

中国化学会の年会開会式には、毎回数千人が参加する。会場となる大学の体育館でないと収容できないという。今年は、4月13日午前、収容能力5,000人の四川大学体育館に約4,000人が参加して行われた。ちなみに年会参加登録者は、4,800人とのこと。広い壇上に、Chunli Bai 前会長・現中国科学院院長、Jiannian Yao 会長はじめ中国化学会幹部、四川省幹部、四川大学幹部、米国化学会



写真1 満席の開会式

次期会長、英国王立化学会会長、日本化学会会長、韓国化学会会長、台湾化学会（正式には、Chemical Society located in Taipei）会長、JACS 編集委員長など招待者が二列に整列した。Yao 会長の開会のあいさつに続いて各国化学会会長が祝辞を述べた。例年どおりの各賞の授与後、80周年記念として、Chunli Bai 院長と Ada Yonath 教授（2010年ノーベル化学賞受賞者）が講演を行った。Chunli Bai 院長は、中国の化学分野の論文数は、2000年は、米・日・独に次ぐ4番目だったが、2007年に米国に並び、2008年に第1位になったと誇らしげに紹介した。

### 5カ国化学会幹部並びに中国化学会によるリーダーシップフォーラム

開会式終了後、14時半～18時、5カ国化学会幹部と中国化学会並びに National Science Foundation China (NSFC: Funding Agency) の幹部が集まって、“Sustainable Society and Chemistry”のテーマで、各国から20分のプレゼン後、各国共通の課題として、社会での化学の理解を深めるために何をすべきか、

教育の重要性（特に初等中等）、政策決定者へどのように影響を及ぼすかなど自由討議を行った。

中国より、中国と米国における化学コースへの入学者数の比較紹介があった。中国/米国：大学 34,000/19,500、修士 14,000/3,000、博士 3,200/3,400 である。NSFC は、科学技術への予算が毎年大きな伸びを示していることを紹介した。予算は、2011年：12 Billion 元（1,700 億円）、2012年：15 Billion 元（2,200 億円）。うち化学関連は2011年：2 Billion 元（290 億円）である。

さらに、中国の化学の地位向上の状況を、2006～2010年は1位になっていること、1位でなくても2000～2005年に比して大きく上昇していることを様々な指標を使い紹介した。指標は、トムソン・ロイターなどが公表している論文数、引用数、特許数、研究機関の順位、化学産業の売上高など多岐にわたる。同時に、中国の科学は、Big になったが Strong ではない、オリジナルは Rare であると締め括り、最近のオリジナル研究



写真2 リーダーシップフォーラムで存在感をアピールする中国

成果の例 (*Nature*, *JACS*, *Angewandte Chem.* に掲載された中国人による論文) を示して終わった。

### アジアでの存在感の向上

中国化学会幹部から、日中の協力関係を継続し、特に日中若手化学者フォーラ

ムを長続きするものにしたと強いコメントがあった。当方も同様である。次回(第3回)フォーラムは、日本化学会第93春季年会(立命館大学びわこ・くさつキャンパス、2013年3月22日~25日)の中で開催予定である。

本会は、平成24年度の基本活動方針

の1つとして、国際連携の強化、特にアジアでの存在感の向上をあげている。中国の自信を見るにつけ、日本は今後どのように発展し、どのような国際的な役割を目指すのか、明確にする必要を感じた。

(川島信之(日本化学会常務理事))

©2012 The Chemical Society of Japan

### 第2回日中若手化学者フォーラム

2010年6月の中国アモイ大学における第1回日中若手化学者フォーラム開催に続き、昨年3月には日本化学会第91春季年会において2回目のフォーラムが予定されていたが、東日本大震災のためやむなく中止となった。そこで、今回、中国化学会第28年会において第2回日中若手化学者フォーラムを改めて開催する運びとなった。テーマは昨年の予定と同じく“Electrochemical Energy Conversion & Storage”である。日本からの参加者は、山田淳夫(東大、リーダー)、駒場慎一(東理大、サブリーダー)、光島重徳(横国大)、入江寛(山梨大)、近藤剛弘(筑波大)、野瀬嘉太郎(京都大)、犬飼潤治(山梨大)の7名、中国からの参加者は、Lin Zhuang (Wuhan University, リーダー)、Yongyao Xia (Fudan University)、Yuguo Guo (Institute of Chemistry, Chinese Academy of Sciences)、Peng Wang (Changchun Institute of Applied Chemistry, Chinese Academy of Sciences)、Shengli Chen (Wuhan University)、Deli Wang (Southwest University)、Yan Liu (Beijing University) の7名、計14名であった(敬称略、順不同)。

フォーラムに先立ち、参加者全員で顔合わせを兼ねた会食を行い意見交換を行った。中国7名の参加者のうち2名は日本に留学・就職した経験があり、日本語も堪能であった。留学やポストクについて話を聞くと、「一般的には、米国で留学・研究を行う希望が多く、実際に人数も一番多い。ただし、日本が強い分野に



については日本を希望する学生・研究者も多く、帰国してからの職を得るにも有利であった。今回のテーマである“Electrochemical Energy Conversion &

Storage”については、日本が世界で優位にあるため日本への留学希望が多いとの話を伺った。実際に、今回の中国側参加者である Beijing University の Yan



Liu 准教授は、横国大光島教授と同じ研究室で研究を行っていた経緯のあることがわかった。

フォーラムは、4月13日午後から4月14日午前にかけて、四川大学研究生院大樓の一室において行われた。中国化学会 Yao 会長並びに日本化学会岩澤会長の挨拶後、二次電池、太陽エネルギー利用、燃料電池の順に発表及び討論が行われた。本フォーラムはオープン形式であったが、聴衆には若い学生・研究者が多く、本分野に興味を持つ中国人研究者の勢いを感じさせられた。質疑応答も大変活発に行われた。また、英語の発表ということもあり、海外からの聴講者も数多く見受けられた。一般化は難しいが、精密な材料解析とその結果を利用した研究開発は、日本に1日の長があるように思われた。また、日本人研究者の方がチャレンジングな領域に踏み込んでいるようにも感じられた。しかしながら、両国の発表内容・レベルなどに大きな違いがあったわけではなく、協力・競争の相手であると再認識した。

発表者が14人と限られていたため、日中の研究者が個人的に知り合えたことは、今後の研究上大きな財産である。また、両国化学会の今後の発展にも大きな役目を果たすと思われる。岩澤会長をはじめとし大変有意義な機会を与えていただいた日本化学会関係者各位に深く感謝するとともに、会の運営に献身的であった中国の関係者にも敬意を表したい。

(犬飼潤治(山梨大学燃料電池ナノ材料研究センター))